第190回　日文研フォーラム

■

玄界灘を渡った鬼のイメージ

なぜ韓国のトケビは日本の鬼のイメージで語られるのか

The Influence of Japanese *Oni* in the Korean Imagination of *Tokebi* (monsters)

■

金　容儀
KIM Yongui

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター
所長　片倉もとこ

● テーマ ●

玄界灘を渡った鬼のイメージ

なぜ韓国のトケビは日本の鬼のイメージで語られるのか

The Influence of Japanese *Oni* in the Korean Imagination of *Tokebi* (monsters)

● 発表者 ●

金　容儀
KIM Yongui

全南大学校人文大学 副教授
Assistant Professor, College of Humanities, Chonnam National University
国際日本文化研究センター 外国人研究員
Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies

2006年４月18日（火）

発表者紹介

金　容 儀
Kim Yongui
全南大学校人文大学 副教授
Assistant Professor, College of Humanities, Chonnam National University
国際日本文化研究センター 外国人研究員
Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies

略　歴

1988年2月　全南大学校人文大学日語日文学科卒業
1991年2月　中央大学校大学院日語日文学科修士課程修了（文学修士）
1994年3月　大阪大学大学院文学研究科修士課程修了（文学修士）
1998年3月　大阪大学大学院文学研究科博士課程修了（文学博士）
1999年3月～現在　全南大学校人文大学日語日文学科　副教授
2002年4月～現在　沖縄国際大学南島文化研究所　特別研究員

著訳書

『日本の文化と芸術』(2000、共著)
『日本を強くした文化コード16』(2000、共著)
『日本の昔話』(柳田国男著、2002、共訳)
『戦争と人々－下からの韓国戦争の研究』(2003、共著)
『文化時代のデジタル・アーカイブス』(2005、共著)
『神になった人々』(小松和彦著、2005、共訳)
『日本の妖怪文化－その生成原理および文化産業的機能－』(2005、共著)
『明治大正史　世相篇』(柳田国男著、2006、共訳)

論　文

「近代における韓日昔話の影響関係－教科書に語られた『瘤取り爺』譚を中心に」『近畿民俗』第153号、近畿民俗学会、1998年、pp.7-24
「沖縄八重山諸島の御嶽信仰」『訪日学術研究者論文集』第10巻、日韓文化交流基金、2003年、pp.311-326　など

1．はじめに

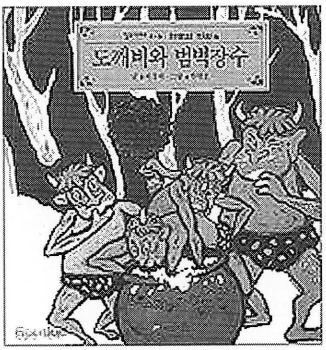
今日韓国の子供の間で読まれている絵本や童話集に登場するトケビの絵を見ると、なぜか日本の鬼のイメージに非常によく似ている。これは、絵本や童話集に限らず、児童劇、子供向けのトケビのキャラクター商品などにも広く見られる現象である。

トケビとは、その属性において部分的に日本の鬼や河童などと対比される韓国の「妖怪」のことである。韓国のトケビは、一筋縄では説明がつかない多種多様な性質をもっているが、大筋では人間に富をもたらしたり、害を与えたりする両面性をもった超自然的な存在として理解されている。トケビについての伝承は、南から北まで韓国各地に広く分布している。また、民間伝承の世界に頻繁に登場するだけでなく、地域によっては民間信仰の対象にもなっている。

〈絵1〉は、韓国の「トケビ祝祭」に登場するトケビの形姿であり、〈絵2〉のほうは、現代の韓国の絵本に登場するトケビの絵である。これらのトケビのイメージを見ていると日本の鬼の形象に非常に似ていることがわかる。なぜ韓国のトケビは、これだけ日本の鬼のイメージに酷似しているのか。両者のあいだには、歴史的・文化的背景において何かつながりがありそうである。これから、トケビのイメージに日本の鬼のイメージが

採り入れられるようになったプロセス、その歴史的・文化的背景などを考察していきたい。まず、日本における鬼のイメージの成立の考察から始めることにしよう。

絵１　韓国の「トケビ祝祭」に登場するトケビ



絵２　韓国の絵本に登場するトケビ

2．日本における鬼のイメージの成立と展開

今日、日本人が思い描く典型的な鬼のイメージは「姿かたちは人間に似ているが、人間よりもはるかに大きな体をしていて、筋骨たくましく、肌の色は赤や青や黒といった色をしており、頭に一つないし二つの角をもち、虎の皮のふんどしを着け、手には金棒をたずさえている」もののようである。

ところが、本来鬼のような妖怪たちは目に見えない存在であって、目に見えないゆえに、人々の間で恐れられていた。たとえば、『倭名類聚抄』巻一「天地部」には、「鬼物隠而不欲顯形、故以称也」とあって、もともと鬼は目に見えない存在であったことがうかがえる。しかし、現在日本人の間では、まるで自分自身の目で見たかのように具体的な鬼のイメージが語られている。日本の多種多様な妖怪の中で、鬼ほどその姿の定まったものはないであろう。

今日のような鬼のイメージが成立したのは、いつ頃のことであったのだろうか。少なくとも平安時代には、仏教などの影響によって、ある程度一定した鬼のイメージが語られはじめたと言える。鬼のイメージは、その後、絵巻物や能面などにおいて、より細部にいたる具体的な形象が徐々に確立されていった。

そして、今日のような鬼のイメージが固定され、広く普及するようになる過程では、江戸時代に盛んに作られた子供向けの絵本、近代に入ってからの絵本や教科書の挿絵などの影響が決定的であったと考えられる。説話の世界と違って絵本の世界では、鬼が何らかの具体的な形象で表現されなければならなかったからである。

そもそも鬼のような妖怪のイメージというものは、人間の想像力によって創り出されたものである。注意すべきは、そのイメージもまた、それ以前の何らかの具体的な図像を参考にして創り出されたものであって、まったく初めて創り出されたものではないということである。この点について、イギリスの写真家フレッド・ゲティングスは、次のように指摘している。

> これまで悪霊に押しつけられてきた姿はどれも人間の想像力の産物だったり、黒魔術師の輪のなかで悪霊がまとう薄気味わるい姿にちなんだものだとしてみよう。だがやはりそれにしても、こういう姿の濫觴はどこにあるのか、と問いかけずにはいられない。じつをいえば、人は自分でかくあれかしと思っているほど想像力に富んではいない。人間の想像力といえども、無から有を創りだすことなどまずできない。だからこそ、このうえない怪作や想像力に富んだ作品ですら、たいていは前代

のアイデアやイメージの痕跡がほのかにうかがわれるのである。（フレッド・ゲティングズ、阿部秀典訳『オカルトの図像学』青土社、一九九四年）

すなわち、今日の日本人が思い描く鬼のイメージは、「前代のアイデアやイメージ」を参照して創り出されたものであると考えられよう。

今日の鬼のイメージに、その頭には一本か二本の角が生え、虎の皮のふんどし（のようなもの）を着けている「ウシトラ」の姿をしているのは、「鬼門（うしとら）に居座するゆえ」と言われる。しかし、馬場あき子が指摘するように、「この艮（うしとら）の方向を、牛と虎の要素より造形されてゆく鬼の塑像の原因にあてた俗説は、たぶんに結果論的」（馬場あき子、『鬼の研究』ちくま文庫、一九八八年、四六ページ）である。

日本の鬼の図像の発生を最も古い時代の文献に求めるならば、その代表的なものの一つとして、中国の『山海経』があげられる。『山海経』には、頭に角が生え、虎の皮のようなものをまとった、人身獣面の怪物が多く登場している。断定はできないが、今日の鬼のイメージに見る、頭の角と虎の皮のふんどし（のようなもの）の起源は、それらの人身獣面の怪物の姿に求めることができるであろう。それについては、江戸時代に鳥山石燕が『画図百鬼夜行』を作るにあたり、『山海経』を参考にしたことからもうかが

える。このように、日本における鬼のイメージの発生と『山海経』は少なからぬ関連があったと思われる。

しかし、今日のような鬼の具体的な図像の定着は、平安・鎌倉時代の絵巻物に登場する、羅刹や牛頭鬼、馬頭鬼、地獄卒などから始まったようである。例えば、『餓鬼草子』（河本家本）の第八段（「塚間住食熱灰土餓鬼」）には、険しい表情の赤と青の羅刹が餓鬼に向かい、燃える剣で威かしている場面である。羅刹は腰に虎の皮を巻いている。

また、『地獄草子』（益田家本甲巻）第四段の「剥肉地獄」を見ると、三人の比丘が地獄卒の鬼によって、皮を剥がれている場面がある。虎の皮のふんどしを着けているかどうか、判別しかねる鬼もあるが、剣を手に作業を見守っている鬼は虎の皮のふんどし（のようなもの）を着けている。

このように、平安時代の絵巻物に登場するこのような羅刹や地獄卒などのイメージがもとになり、今日のような「ウシトラ」の鬼のイメージが定着していくようになったと考えられる。そして、江戸時代に多く作られた子供向けの絵本、それを受け継いで作られた近代の絵本や教科書の挿絵により、決定的に広く知られるようになったのである。

江戸時代には、赤本や青本、上方子供本などの子供向けの絵本が流行した。そこに登場する鬼の図像を見ると、退治されるべき恐ろしいイメージが強調されたものがある一

方で、パロディー化されユーモラスな雰囲気に満ち、親しみさえも感じさせるものも多い。例をあげてみよう。

〈絵3〉は、『新なぞつくし』（「二ウ三オ」）の絵で、五月幟から抜け出した鍾馗が鬼を捕える場面である。また〈絵4〉は、『酒呑童子郭雛形』の中で、初めての郭遊びに有頂天になった鬼たちが酒に酔っている場面である。

絵3　『新なぞつくし』の鬼

絵4　『酒呑童子郭雛形』の鬼

〈絵3〉が、退治されるべき恐ろしいものとしての鬼を描いたとすれば、〈絵4〉は、鬼を擬人化し、日常生活の次元において鬼を描いた、パロディー化したものと言える。全体的にたいへんユーモラスな雰囲気が漂っている。二つの絵に描かれたいずれの鬼も、その頭には一つか二つの角が生え、虎の皮のふんどし（のようなもの）を着けているなど、鬼の「ウシトラ」のイメージが定着していたことが確認できる。このように、江戸時代の絵本の世界において固定された鬼のイメージは、近代の童話集や教科書の挿絵の世界へとつながっていった。

〈絵5〉は、日本の『小学国語読本』巻一（一九三三）に収録された「桃太郎」の挿絵の一つで、桃太郎が鬼の大将を退治している場面である。〈絵3〉と〈絵5〉を比べてみると、〈絵5〉が〈絵3〉をもとにして描かれたものであることが一見してわかる。〈絵5〉には、鍾馗こそ登場しないものの、鬼を追いかけて刀を振っている桃太郎と少年の姿、倒れている鬼の姿などの構図が〈絵3〉と酷似している。

〈絵6〉、は日本の『小学国語読本』巻二（一九三三）に収録された「瘤取り爺」の中で、鬼たちが爺の踊りを見守っている場面を描いたものである。〈絵6〉のほうも、先の〈絵3〉と〈絵4〉に登場した鬼のイメージとほぼ変わらない。特に、鬼の「ウシトラ」のイメージは揺るぎなく固定している。

絵 5 『小学国語読本』巻一（1933）の挿絵

絵 6 『小学国語読本』巻二（1933）の挿絵

以上、「ウシトラ」に特徴付けられる日本の鬼のイメージが固定されるようになった歴史的過程を簡略に概観した。今日の日本の鬼のイメージは、主に平安時代の絵巻物から出発して、江戸時代の絵本などの世界においてほぼ定着していったと考えられる。そして、近代の絵本や教科書の挿絵などを通じて、一定した鬼のイメージが日本全国に広まっていくようになった。次に、韓国におけるトケビのイメージの変遷をたどってみよう。

3．韓国におけるトケビのイメージの成立と展開

3―1．近代以前におけるトケビのイメージ

近代以前の韓国におけるトケビのイメージの考察において、まず指摘しておかねばならないのは、近代以前の韓国の美術史・芸能史においては、固定したトケビのイメージが見当たらないということである。このことは、日本ではすでに近代以前に「ウシトラ」とも言われる鬼のイメージが定着していたことと対照的である。

韓国の美術史・芸能史において表現されたトケビのイメージとしては、次のようなものがあげられる。

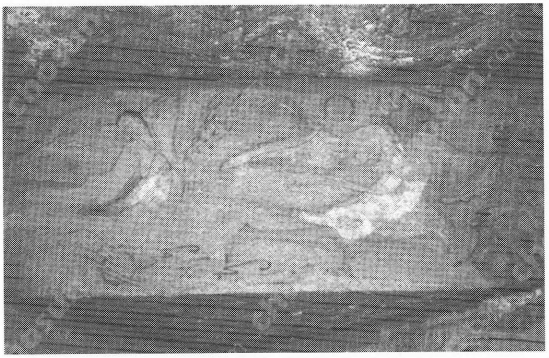
①古代の古墳壁画に描かれた人身獣面の「怪神」
②「鬼面瓦」に見る「鬼」
③チャンスンの造形
④仏教絵画に描かれた羅刹・地獄卒など
⑤仮面劇の仮面

以下、順を追って考察してみよう。

韓国のトケビのイメージの起源は、古代の高句麗時代（前一世紀後半―六六八）の古墳壁画に描かれているような人身獣面の「怪神」にまで遡る可能性がある。高句麗時代の古墳は、中国吉林省の集安県や北韓（朝鮮民主主義人民共和国）の平壌市付近に多く見られ、これまでに七十余りの例が報告されている。

〈絵7〉は、中国集安県所在の古墳の壁面に描かれているものである。人間の身体に牛の頭がついた人身獣面のものになっている。この人身獣面の存在については、残念ながらいまだその明確な性格が知られていない。

〈絵8〉は、統一新羅時代（六七七―九三五）の「鬼面瓦」である。この〈絵8〉を見ると、威嚇的な表情、頭に生えている角など、今日表現されているトケビのイメージに



絵７　高句麗時代の古墳（中国吉林省集安県）の壁画

絵８　統一新羅時代の「鬼面瓦」

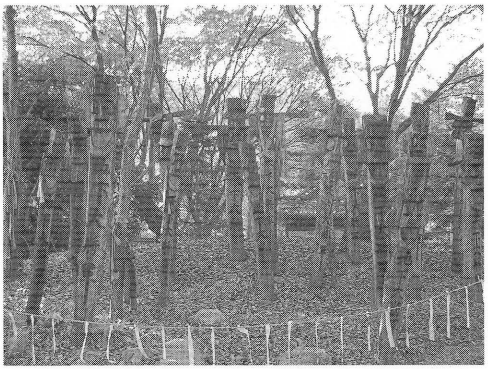
かなり接近しているように見える。

韓国の「鬼面瓦」は、古代の三国時代（三一三―六七六）から朝鮮時代（一三九二―一九一〇）にいたるまで作り続けられたが、特に古代の統一新羅時代にさかんに作られるようになった。その起源は、中国の殷時代（?―前十一世紀頃）以降、流行するようになった古銅器に施された饕餮文（トウテツモン）に求められると言われる。この「鬼面瓦」は、トケビの図像的な表現として、従来から盛んに多く議論されてきた。たとえば、美術史家の秦弘燮は、「鬼面瓦」に表現された「鬼面」をトケビそのものとみなして論じている。また、民俗学者の朱剛玄は、「鬼面瓦」をトケビの図像的な表現の「原形」の一つとしてあげている。

〈絵9〉は、かつて村の入口に立てられていたチャンスンの造形である。目や鼻などが異常に強調され、威嚇的な表情をしている。この「チャンスン」という言葉の漢字語源としては、朝鮮時代の「長承」・「長丞」などの名称があり、地域によっては「ボックス」とも呼ばれる。〈絵9〉は木彫のチャンスンであるが、石彫も多い。チャンスンは、村の入口に立てられ、主として村の守護神のような機能を持っていたが、「里程標」（里数を記して路傍に立てたもので木彫が多い）の機能も果たしていた。

〈絵10〉は、仏教地獄図の「十王図」中の「火蕩地獄」を描いたものである。地獄の

地獄卒が罪人たちを熱湯の中に入れている場面である。この〈絵10〉では、地獄卒のイメージが注目される。韓国の仏教絵画には、羅刹や地獄卒などが登場する「地獄図」が多いが、それらの羅刹や地獄卒などを、近代以前におけるトケビの図像的表現の一つとしてあげることができるであろう。韓国の仏教絵画においても、羅刹や地獄卒などの形象がトケビの形象に類似していることがうかがえる。



絵９　韓国の村の入口に立てられているチャンスン

絵10　「十王図」中の火蕩地獄図

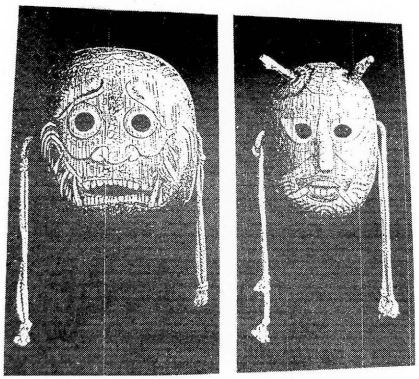
〈絵11〉は、筆者が注目している、慶尚南道の「固城五広大」というタルチュム（仮面劇）に登場するヨンノ（ビビあるいはビビセともよばれる）の仮面である。「広大」とは、「仮面戯・人形戯を演じると同時に、滑稽なことばやものまねの芸、またさら回しなどの曲芸や綱渡りをする者たち」を指すが、「五広大」というのは、「五人の広大の遊び」という意味である。「固城五広大」は、慶尚南道の固城付近に伝承されている「五広大」のことである。この「固城五広大」に登場する仮面の一つであるヨンノを見ると、威嚇的な表情、頭に生えている角など、今日知られているトケビのイメージにかなり近いと言える。しかし残念ながら、ヨンノに関しては、「何でも食いころしてしまう天上にすむ想像上の恐ろしい動物」として知られているだけで、詳細についてはいまだ不明である。

以上、近代以前の韓国の美術史・芸能史における主なトケビのイメージを検討してきた。その結果、今日のトケビに近いイメージをしているものが少なからずあることがわかった。しかし、それらの間には、これと言えるような共通した要素がなかなか見つからない。換言すれば、近代以前の韓国では、トケビを表現する一定したイメージが定着していなかったと言える。この点、日本では近代以前に、すでに一定した鬼のイメージが定着していたことと対照的である。次に、近代以降のトケビのイメージを考察するこ

とにする。

3―2．近代以降におけるトケビのイメージ

〈絵12〉は、中村亮平編の『朝鮮童話集』（一九二六、日本文）所収「瘤取爺さん」の挿絵である。トケビ（本文では「鬼」と表記）たちが爺の歌を聴いて寄り集まった場面であるが、トケビたちの姿かたちは、兎あるいは狐などの動物を思わせる黒い影のよう



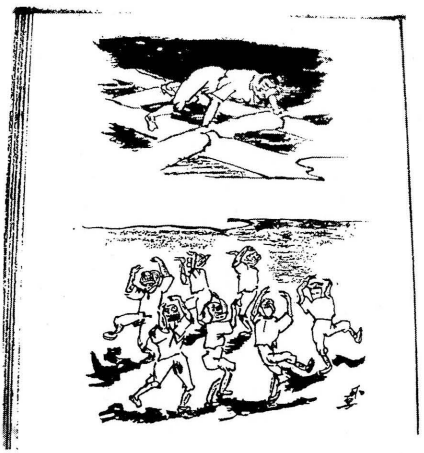
絵11 「固城五広大」のヨンノの仮面

絵12 『朝鮮童話集』「瘤取爺さん」のトケビの挿絵

に処理されている。すなわち、今日韓国社会に定着しているようなトケビのイメージは確認できない。

また、〈絵13〉は、同じく『朝鮮童話集』所収の「兄弟と鬼屋敷」（韓国では、「トケビの砧」という話名で知られている）の挿絵である。兄がトケビたちの宴会の様子を天井の上から覗いている場面である。しかし、そこに描かれているトケビは、人間の姿をしている。これはトケビたちの宴会というよりも、人間の宴会の様子のように見える。

〈絵12〉と〈絵13〉には、今日知られているようなトケビのイメージはどこにも見当たらない。なぜ、今日



絵13 『朝鮮童話集』「兄弟と鬼屋敷」のトケビの挿絵

知られているトケビのイメージとは、全然違う挿絵が描かれたのであろうか。結論を言うと、『朝鮮童話集』の挿絵画家は、トケビを絵で表現することができなかったと考えられる。すなわち、この時期にはまだ、これと言えるようなトケビの図像が定着していなかったのである。そのため、〈絵12〉と〈絵13〉のような姿かたちでトケビを表現したと見るべきである。

4．こうして韓国のトケビのイメージは「誕生」した

韓国のトケビが、手足の揃ったまとまった姿で描き出されたのは、管見の限り、日本植民地時代に編纂された普通学校の「朝鮮語読本」の挿絵が最初のものである。すなわち、『普通学校朝鮮語読本』巻二（一九二三）の「瘤を取られた話」に収録されている二枚のトケビの挿絵が最初である。これに続いて、『普通学校朝鮮語読本』巻四（一九三三）の「瘤を取られた話」の挿絵にも登場する。

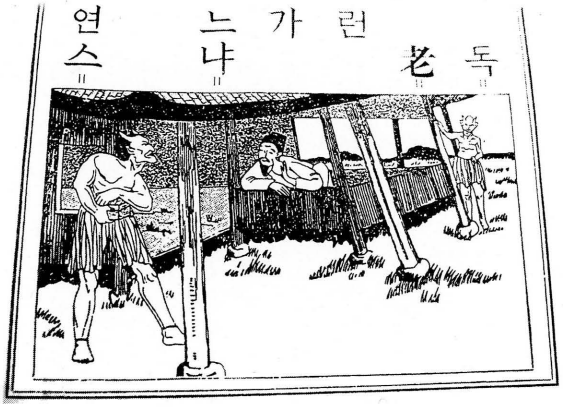
〈絵14〉は、『普通学校朝鮮語読本』巻二（一九二三）の「瘤を取られた話」所収の挿絵である。空き家に入って歌を歌っている老人の前に、トケビたちが現れた場面を描いたものである。画面左手のトケビの頭には二本の角が生え、虎の皮のふんどしとは言い

がたいが、それに似た腰蓑のようなものを着けている。トケビは筋骨たくましく描かれ、手には老人との「交換」のための宝物が入っているのか、小さな箱を持っている。

この〈絵14〉のトケビは、日本の多種多様な鬼の中でも、主として能に登場する「般若」のイメージを思わせるところがある。画面右手のトケビもそれに近いイメージになっている。すなわち、この〈絵14〉のトケビのイメージは、挿絵画家が日本の鬼の図像を参照して創り出したのではないかと考えられる。次に、〈絵15〉を注目してみよう。

〈絵15〉は、『普通学校朝鮮語読本』巻二（一九二三）の「瘤を取られた話」の、瘤を取られた老人の真似をして、トケビをだましたもう一人の老人に、トケビがもう一つの瘤をくっつけて、消えて行く場面の挿絵である。トケビの形象は具体的ではなく、黒い影のように描かれているが、頭に角が生えていることだけは確認できる。

以上、日本の植民地時代の普通学校の「朝鮮語読本」に収録されている二つのトケビの挿絵を紹介した。まず、〈絵14〉と〈絵15〉に登場するトケビのイメージは、日本の鬼のイメージをモデルとして創り出されたものであったと言える。しかし、「朝鮮語読本」の挿絵に現われたトケビのイメージは、日本の鬼のイメージの影響を受けたものであったが、この時にはまだ、「ウシトラ」のような鬼のイメージが完全に定着していたと断定することはできない。韓国のトケビのイメージが、日本の鬼のイメージをもって描か



絵14 『普通学校朝鮮語読本』巻二（1923）
「瘤を取られた話」のトケビの挿絵１

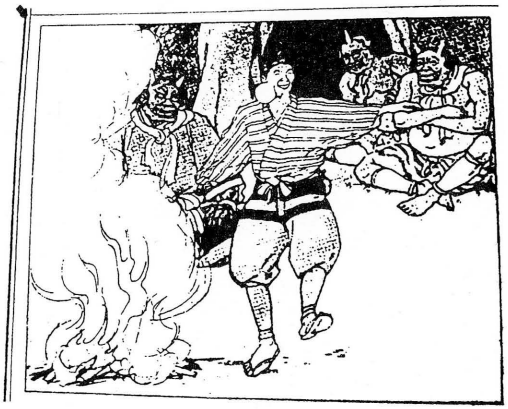
絵15 『普通学校朝鮮語読本』巻二（1923）
「瘤を取られた話」のトケビの挿絵２

れるようになった決定的な契機は、日本の植民地時代の「国語読本」（日本語）による。

〈絵16〉は、植民地時代に韓国の小学校で使用された『初等国語読本』巻二（日本語、一九三九朝鮮総督府編）「瘤取り爺」の三枚の挿絵中の一つである。『初等国語読本』巻二に収録された「瘤取り爺」は、日本の『小学国語読本』巻二（一九三三文部省編）に収録された「瘤取り爺」とまったく同じものである。〈絵16〉は、鬼の宴会に加わった爺が歌い踊っているのを、鬼たちが面白がりながら見守っている場面である。鬼の頭には一本か二本の角が生え、筋骨たくましい体には、虎の皮のふんどしを着けている。

以上の考察により、日本の鬼のイメージが韓国のトケビのイメージに重ね合わされるようになったプロセスが明らかになった。その出発点は日本の植民地時代の普通学校の「朝鮮語読本」の挿絵であり、「国語読本」（日本語）の挿絵によって決定的に重なり合うようになったことがわかった。つまり、日本の「小学読本」に登場する鬼のイメージを参考にして創り出されたトケビのイメージが「朝鮮語読本」に収録され、「国語読本」（日本語）には、日本の鬼の図像が収録されることによって、もともと相通じるイメージで描かれていた両方の図像が重なるようになり、両者の区別が全くつかないようになったのである。

残された重要な課題は、なぜ日本の鬼の図像をモデルとしてトケビの図像が創り出さ



絵16 『初等国語読本』巻二（1939）
「コブトリ」の鬼の挿絵

絵17 呉潤の版画に登場するトケビ

れたのか、また、なぜそれが今日まで継続して受け入れられるようになったのか、その理由を解明することである。冒頭で指摘したように、日本の鬼の図像の影響によって創り出されたトケビのイメージは、今日の韓国においては、絵本や童話集に限らず、児童劇や漫画、子供向けのトケビのキャラクター商品などにも広く見られる。

今まで検討したように、近代以前の韓国の美術史・芸能史においては、トケビの定型化されたイメージは成立していなかった。そのため、普通学校の「朝鮮語読本」にトケビの挿絵が必要になった際、日本の鬼の図像を参考にするようになったものと考えられる。つまり、日本の鬼のイメージはいくつかの選択肢の中の一つとして参照されたのである。仮にその時すでに、トケビの定型化されたイメージが存在していたならば、そのイメージを用いたであろうと考えられる。

5．韓国におけるトケビのイメージの解体と再構築の動向

トケビのイメージの問題をめぐって興味深いのは、最近、韓国社会に見られるトケビのイメージの解体および再構築の動向である。今日の韓国社会に流布しているトケビのイメージが、実は日本植民地時代に「創られた伝統」であったという自覚から、従来の

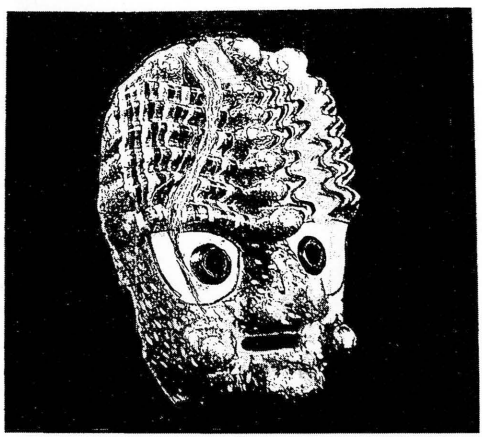
トケビのイメージを解体し、新たに再構築しようとする動きが見られるのである。こうした動向の背景には、いわゆる「反日感情」や「ナショナリズム」などの問題も絡んでいる。例をあげてみよう。

〈絵17〉は、美術家の呉潤の版画に登場するトケビである。版画という表現様式に特有な雰囲気の違いを考慮するとしても、これまで取り上げてきたトケビのイメージとは大分異なることがわかる。この版画が制作された時期（一九八五）、韓国では民衆運動が盛んに行なわれていた時期にあたっており、作者が民衆の情緒を表現しようと努めたことが読み取れる。画面左手のトケビたちは、韓国の伝統的な民俗音楽である「農楽」に使われる楽器をもって遊んでいる。画面の右側には、相撲を取っているトケビ、酒を飲んでいるトケビなど、トケビを材料にして民衆の生活が描き出されている。トケビたちのまとっている衣装がすべて韓国の伝統衣裳であることも見逃がせない。しかし、トケビの頭の角だけは、ゆるぎなく定型化されている。すなわち、もうトケビの角は、トケビのイメージを視覚的に表現するうえで、欠かせないものになっていたと言える。

〈絵18〉は、在日民俗学者の金両基が、主に韓国の「ボンサンタルチュム」（「鳳山仮面劇」）に登場する「チュバリ」（「酔発」）の仮面をモデルにして、新たにトケビのイメージの再構築を試みたものである。

金両基が韓国の仮面劇に登場する仮面の一つをモデルにしてトケビの「原像」を再構築している点は興味深い。というのは、先に近代以前におけるトケビのイメージを検討しながら、仮面劇の仮面との関連性について述べたが、最近のトケビのイメージの再構築の動向において、再び仮面劇の仮面が注目され始めたからである。

金両基の試みは、日本の鬼のイメージの影響によるトケビのイメージの成立を指摘す



絵18　金両基が試みた新たなトケビの図像（上）と「チュバリ」の仮面（下）

るにとどまらず、自ら積極的にトケビのイメージを再構築しようとしたものである。しかし、金両基の試みは、新たな問題をはらんでいるのも事実である。なぜならば、金両基がモデルにした「チュバリ」の仮面とトケビの間には、何ら歴史的・文化的なつながりは見られないからである

以上、最近の韓国におけるトケビのイメージの解体および再構築の動向を考察した。トケビのイメージを再構築しようとする動きは今後さらに活発になるものと予想される。トケビのイメージが日本植民地時代に「創られた伝統」であったことを自覚し、新たなトケビ像を再構築しようとする試みは、それなりに意義のあることであろう。しかし、人々の間で定着してしまったトケビのイメージを解体し、新たに再構築するという作業は、そう簡単にはいかないのも事実である。一旦人々の間に広まり、定着したトケビのイメージ（鬼のイメージの影響による）は、小数の人々の試みによって簡単に変わるようなものではないからである。

今後、韓国のトケビのイメージをめぐる議論がどのように展開され、どれほど「韓国的」なトケビのイメージが創り出されていくのかを、冷静に見守り続けていきたいと思っている。

発表を終えて

第190回日文研フォーラムでの発表を終えて、日文研の宿舎に帰る途中、私は格別な思いがした。「聴衆の反応はどうだったのか」「まともに話せたのか」という反省の気持ちよりも、「感慨無量」というのが、率直な気持ちであった。というのは、「日文研フォーラム」は、私にとって特別な意味のある発表の場だったからである。

私は、1992年から6年間、大阪大学に留学し、日本文化学（民俗学・文化人類学）を学んだ。当時日文研には日本の内外から著名な研究者が集まり、世界に向かって日本文化の発信をはかっていたように覚える。日本文化学を学んでいた留学生の私にとって、日文研は日本文化研究の「総本山」のように見え、「日文研フォーラム」が開催されるたびに、なるべく聞きにいくように心がけていた。大阪から距離的に近いということもあっただろう。

「日文研フォーラム」に何回も出席し、講師の話を聞いているうちに、私は一つの「野心」に燃えていた。「10年後には、自分も日文研フォーラムで講演するようになろう」と、密かに自分に向かって誓っていたのである。「日文研フォーラム」で講演するということは、一人前の研究者として認められた証のように考えられたからである。

それから、10年くらいの歳月がたった今年の4月、私はやっと自分に誓っていた約束をはたすことができたのである。

私の日文研滞在中、多くの方々にお世話になった。小松和彦先生には研究面において御教示をいただき、日文研フォーラムの発表では貴重なコメントをいただいた。記して感謝したい。研究協力課、図書資料課、コモンルームの皆さんにも、この場を借りてお礼を申し上げたい。

日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
⑩1	9.11.11 (1997)	KIM Uchang 金 禹昌（高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授） リヴィア・モネ Livia MONNET （モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員） カール・モスク Carl MOSK（ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授） ヤン・シコラ Jan SYKORA（カレル大学助教授・日文研客員助教授） Kinya TSURUTA 鶴田 欣也 （ブリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授） パネルディスカッション 「日本および日本人—外からのまなざし」
⑩2	9.12. 9	ジョナ・サルズ Jonah SALZ（龍谷大学助教授） 「猿から尼まで—狂言役者の修業」
103	10. 1.13 (1998)	KANG Shin-pyo 姜 信杓 （仁済大学校人文社会科学研究所教授・日文研客員教授） 「京都考見録：韓国文化人類学者の経験」
⑩4	10. 2.10	GAO Wenhan 高 文漢（山東大学教授・日文研客員教授） 「中世禅林の異端者——休宗純とその文学」
105	10. 3. 3	シュテファン・カイザー Stefan KAISER（筑波大学教授） 「和魂漢才、和魂洋才—語彙・表記に見る日本文化の特性」
106	10. 4. 7	スミエ A. ジョーンズ Sumie A. JONES （インディアナ大学教授・日文研客員教授） 「幽霊と妖怪の江戸文学」
107	10. 5.19	リヴィア・モネ Livia MONNET （モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員） 「映画と文学の間に—金井美恵子の小説における映画的身体」
⑩8	10. 6. 9	Hiroshi SHIMAZAKI 島崎 博（レスブリッジ大学教授・日文研客員教授） 「化粧の文化地理」

⑩⑨	10. 7.14 (1998)	Peipei QIU 丘　培培（バッサー大学助教授・日文研来訪研究員） 「なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか —詩的イメージとしての典故—」
110	10. 9. 8	ブルーノ・リーネル Bruno RHYNER（チューリッヒ大学講師・ユング派精神分析家・日文研客員助教授） 「日本の教育がかかえる問題点」
⑪①	10.10. 6	アハマド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ Ahmed M. F. MOSTAFA （カイロ大学講師・日文研客員助教授） 「『愛玩』—安岡章太郎の『戦後』のはじまり」
⑪②	10.11.10	アリソン・　　トキタ Alison McQUEEN-TOKITA （モナシュ大学助教授・日文研客員助教授） 「『道行き』と日本文化—芸能を中心に」
113	10.12. 8	グレン・フック Glenn HOOK （シェフィールド大学教授・東京大学客員教授） 「地域主義の台頭と東アジアにおける日本の役割」
⑪④	11. 1.12 (1999)	DU Qin 杜　勤 （華東師範大学助教授・華東師範大学外国語学院 第２学部副学部長・日文研客員助教授） 「『中』のシンボリズムについて—宇宙論からのアプローチ」
115	11. 2. 9	シーラ・スミス Sheila SMITH （ボストン大学助教授・日文研客員助教授） 「日本の民主主義—沖縄からの挑戦」
⑪⑥	11. 3.16	エドウィン A. クランストン Edwin A. CRANSTON （ハーバード大学教授・日文研客員教授） 「うたの色々：翻訳は詩歌の詩化または死化？」
⑪⑦	11. 4.13	ウィリアム J. タイラー William J. TYLER （オハイオ州立大学助教授・日文研客員助教授） 「石川淳著『黄金傳説』その他の翻訳について」
⑪⑧	11. 5.11	KIM　Ji Kyun 金　知見（韓国・仏教教育大学大学院長・日文研客員教授） 「内藤湖南先生の眞蹟—高麗太祖顕陵詩」

119	11. 6. 8 (1999)	マリア・ヴォイヴォディッチ Marija VOJVODIC (モンテネグロ共和国政府民営化推進部外資担当課長・日文研客員助教授) 「言葉いろいろ—日本の言葉に反映された文化の特徴」
⑫⓪	11. 7.13	REECE Sachiko Taki リース・幸子　滝 (米国・ケドレン精神衛生センター箱庭療法トレーニングコンサルタント・日文研客員助教授) 「心理臨床の場に映った私生活の中の暴力と社会の中の暴力」
⑫①	11. 9. 7	SONG Min 宋　敏（韓国・国民大学校文化大学学長・日文研客員教授） 「明治初期における朝鮮修信使の日本見聞」
⑫②	11.10.12	ジャン・ノエル・A. ロベール Jean-Noël A. ROBERT (フランス・パリ国立高等研究院教授・日文研客員教授) 「二十一世紀の漢文—死語の将来—」
⑫③	11.11.16	ヴラディスラブ・ニカノロヴィッチ・ゴレグリャード Vladislav Nikanorovich GOREGLIAD (ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支部極東部長・日文研客員教授) 「鎖国時代のロシアにおける日本水夫たち」
⑫④	11.12.14	X. Jie YANG 楊　暁捷（カルガリー大学準教授・日文研客員助教授） 「鬼のいる光景—絵巻『長谷雄草紙』を読む—」
⑫⑤	12. 1.11 (2000)	エミリア・ガデレワ Emilia GADELEVA（日文研中核的研究機関研究員） 「年末・年始の聖なる夜 —西欧と日本の年末・年始の行事の比較的研究」
⑫⑥	12. 2. 8	LEE Eung Soo 李　応寿（世宗大学校副教授・日文研客員助教授） 「東アジア獅子舞の系譜—五色獅子を中心に—」
127	12. 3.14	アンナ・マリア・トレーンハルト Anna Maria THRÄNHARDT (デュッセルドルフ大学教授・日文研客員教授) 「皇室と日本赤十字社の始まり」
⑫⑧	12. 4.11	ペッカ・コルホネン Pekka KORHONEN (ユワスクラ大学教授・日文研客員助教授) 「アジアの西の境」

⑫⑨	12. 5. 9 (2000)	KIM Jeong Rye 金　貞禮（国立全南大学校副教授・日文研客員助教授） 「五・七・五、日本と韓国」
⑬⓪	12. 6.13	ケネスL.リチャード Kenneth L. RICHARD （県立長崎シーボルト大学教授・日文研客員教授） 「出島―長崎―日本―世界　憧憬の旅 サダキチ・ハルトマン（1867―1944）と倉場富三郎（1871―1945）」
131	12. 7.11	リュドミラ・ホロドヴィッチ Lyudmila HOLODOVICH （ソフィア大学助教授・日文研客員助教授） 「お盆と正教の五旬祭―比較的なアプローチ―」
⑬②	12. 9.12	マーク・メリ Mark MELI（日文研外来研究員） 「『物のあはれ』とは何なのか」
133	12.10.10	リチャード・ルビンジャー Richard RUBINGER （インディアナ大学教授・日文研客員教授） 「読み書きできなかったのは誰か―明治の日本」
⑬④	12.11.14	SHIN Yong-tae 辛　容泰 （東国大学校日本学研究所研究員・日文研客員教授） 「日本語の『カゲ（光・蔭）』外―日本文化のルーツを探る―」
135	12.12.12	CAI Dun da 蔡　敦達 （同済大学日本学研究所助教授・日文研客員助教授） 「中国文人が観た明治日本―旅行記を読む―」
⑬⑥	13. 2. 6 (2001)	バルト・ガーンズ Bart GAENS（日文研中核的研究機関研究員） 「長者の山―近世的経営の日欧比較―」
137	13. 3. 6	ポール・S.グローナー Paul S. GRONER （ヴァージニア大学教授・日文研客員教授） 「仏教の戒律とは何か？」
⑬⑧	13. 4.10	LI Zhuo 李　卓（南開大学教授・日文研客員教授） 「中日姓名の比較について―親族の血縁性と社会性―」
⑬⑨	13. 5. 8	エッケハルト・マイ Ekkehard MAY （フランクフルト大学教授・日文研客員教授） 「西洋における俳句の新しい受容へ」

⑭⓪	13. 6.12 (2001)	XU Subin 徐　蘇斌（日文研外国人研究員） 「中国現代建築の成立基盤―留日建築家・趙冬日と人民大会堂―」
141	13. 7.10	ヘンリー D. スミス Henry D. SMITH, Ⅱ （コロンビア大学教授　日文研外国人研究員） 「忠臣蔵再考―四十七士の三百年―」
⑭⑵	13. 9.18	ジョナサン M. オーガスティン Jonathan M. AUGUSTINE（日文研外来研究員） 「聖人伝、高僧伝と社会事業―古代日本、ヨーロッパの高僧を中心に―」
143	13.10. 9	アレクサンダー・ボビン Alexander VOVIN （ハワイ大学準教授・日文研客員助教授） 「日韓上代言語域：神と国と人と」
144	13.11.13	GUAN Wen Na 官　文娜（日文研外国人研究員） 「日本社会における『近親婚』と中国の『同姓不婚』との比較」
145	13.12.11	チグサ　キムラ　スティーブン Chigusa KIMURA-STEVEN （ニュージーランド・カンタベリー大学準教授・日文研外国人研究員） 「大庭みな子『三匹の蟹』：ミニスカート文化の中の女と男」
⑭⑥	14. 1.15 (2002)	SHIN Chang Ho 申　昌浩（日文研中核的研究機関研究員） 「親日仏教と韓国社会」
⑭⑦	14. 2.12	マシミリアーノ　トマシ Massimiliano TOMASI （ウェスタン ワシントン大学準教授・日文研外国人研究員） 「近代詩における擬声語について」
148	14. 3.12	JEONG Hye Kyeong 鄭　惠卿 （世宗大学校人文科学大学副教授・日文研外国人研究員） 「日韓言語文化の比較―語る文化と語らぬ文化―」
149	14. 4. 9	マッシュー フィリップ マッケルウェイ Matthew Philip McKELWAY （ニューヨーク大学助教授・日文研外国人研究員） 「初期洛中洛外図の人脈と武家作法―三条本を中心に―」

⑮⓪	14. 5.14 (2002)	LEE Kwang Joon 李　光濬 (東西心理学研究所所長・日文研外国人研究員) 「禅心理学的生命観」
⑮①	14. 6.11	LU Yi 魯　義 (中国・北京外国問題研究会教授・日文研外国人研究員) 「中日関係と相互理解」
152	14. 7. 9	アレクシア　ボ　ロ Alexia BORO (イタリア　カ・フォスカリ大学助手・日文研外国人研究員) 「建物と権力—明治初期の東京の建築について」
⑮③	14. 9.10	YEE Milim 李　美林 (日文研外国人研究員) 「近世後期『美人風俗図』の絵画的特徴—日韓比較—」
154	14.10. 8	マルクス　リュッターマン Markus RÜTTERMANN (日文研外国人研究員) 「伝授から伝統へ—中・近世日本における『啓蒙』の一面について」
⑮⑤	14.11. 5	KIM Moon Gil 金　文吉 (韓国・釜山外国語大学校教授・日文研外国人研究員) 「神代文字と日本キリスト教—国学運動と国字改良」
156	14.12.10	スーザン L. バーンズ Susan L. BURNS (米・シカゴ大学準教授・日文研外国人研究員) 「問題化された身体—明治時代における医学と文化」
157	15. 1.14 (2003)	デビット L. ハウエル David L. HOWELL (米・プリンストン大学準教授・日文研外国人研究員) 「天保七年常州那珂湊敵討ち一件顚末」
158	15. 2.18	Zhan Xiaomei 戦　暁梅 (日文研研究機関研究員) 「隠逸山水に秘められた『近代』—富岡鉄斎を読む—」
159	15. 3.11	リチャード H. オカダ Richard H. OKADA (米・プリンストン大学準教授・日文研外国人研究員) 「『母国語』とは誰の言葉？：言語と国民国家」

⑯⓪	15. 4. 8 (2003)	ビルスウェル Bill SEWELL (カナダ・セントメアリー大学助教授・日文研外国人研究員) 「旧満州における戦前日本の町づくり活動」
161	15. 5.20	Park JeonYull 朴 銓烈 (韓国中央大学校教授・日文研外国人研究員) 「神々の使者に扮装する愉しみ—門付け儀礼の演劇性をめぐって—」
162	15. 6.10	RHEEM YongTack 林 容澤 (韓国・仁荷大学校副教授・日文研外国人研究員) 「詩の翻訳は可能か—金素雲訳『朝鮮詩集』の場合—」
163	15. 7. 8	ボイカ エリト ツィゴバ Boyka Elit TSIGOVA (ブルガリア・ソフィア大学準教授・日文研外国人研究員) 「ブルガリア人の日本文化観—その理解と日本文芸作品の翻訳をめぐって—」
164	15. 9. 9	インゲ マリア ダニエルズ Inge Maria DANIELS (ロイヤル・カレッジ・オブ・アート客員講師・日文研外来研究員) 「現代住宅に見られる日本人と『モノ』の関わり方」
⑯⑤	15.10.14	WANG Cheng 王 成 (首都師範大学助教授・日文研外国人研究員) 「阿部知二が描いた“北京”」
⑯⑥	15.11.11	CHEN Hui 陳 暉 (中国社会科学院亜太日本研究所研究員教授・日文研外国人研究員) 「明治教育家　成瀬仁蔵のアジアへの影響－家族改革をめぐって－」
167	15.12. 9	エフゲーニー S. バクシェエフ Evgeny S. BAKSHEEV (国立ロシア文化研究所研究員・日文研外国人研究員) 「人と神とが出会う場所　沖縄県宮古諸島の聖地・拝所—その構造と形態を中心として—」
168	16. 4.13 (2004)	MIN Joosik 閔 周植 (韓国・嶺南大学校教授・日文研外国人研究員) 「風流の東アジア—美を生きる技法—」
⑯⑨	16. 5.11	コンスタンティン ノミコス ヴァポリス Constantine Nomikos VAPORIS (米国・メリーランド大学準教授・日文研外国人研究員) 「参勤交代と日本の文化」

⑰⓪	16. 6. 8 (2004)	WANG Shukun 王　述坤 (中国・東南大学教授・日文研外国人研究員) 「近代における日本、中国の文人・作家の自殺」
⑰①	16. 7.13	ヴィクター ヴィクトロヴィッチ リビン Victor Victorovich RYBIN (ロシア・サンクトペテルブルグ大学助教授・日文研外国人研究員) 「知られざる歌麿—『百千鳥狂歌合はせ』の詩的、文法的分析」
172	16. 9.14	スコット ノース Scott NORTH (大阪大学大学院人間科学研究科助教授) 「セールスマンの死 ： サービス残業・湾岸戦争・過労死」
173	16.10.19	SE Yin 色　音 (中国社会科学院民族研究所研究員 教授・日文研外国人研究員) 「シャーマニズムから見た〈日本的なるもの〉」
174	16.11. 9	LEE HanSop 李　漢燮 (韓国 高麗大学校日語日文学科教授・日文研外国人研究員) 「明治期の外国人留学生と文明開化」
175	16.12.14	アレクサンダー マーシャル ヴィーシー Alexander Marshall VESEY (米国 ストーンヒル大学助教授・日文研外国人研究員) 「近世村社会における仏教僧侶の村人との仲介役的役割」
176	17. 1.11 (2005)	ロイ アンソニー スターズ Roy Anthony STARRS (ニュージーランド オタゴ大学シニア・レクチャラー・日文研外国人研究員) 「国家主義者としての三島由紀夫—戦後の原点」
⑰⑦	17. 2. 8	マッツ アーネ カールソン Mats Arne KARLSSON (ストックホルム大学助教授・日文研外国人研究員) 「僕はこの暗合を無気味に思ひ… 芥川龍之介『歯車』、ストリンドベリ、そして狂気」
⑰⑧	17. 3. 8	WU Yongmei 呉　咏梅 (北京日本学研究センター専任講師・日文研外国人研究員) 「アジアにおけるメディア文化の交通— 中国人大学生が見た日本のテレビドラマをめぐって —」
⑰⑨	17. 4.12	ノエル ジョン ピニングトン Noel John PINNINGTON (アリゾナ大学助教授・日文研外国人研究員) 「中世能楽論における『道』の概念—能役者が歩むべき『道』」

180	17. 5.10 (2005)	CHI Myong Kwan 池　明観 (日文研外国人研究員) 「韓国現代史と日本について—1973年から1988年まで—」
181	17. 6.14	イアン ジェームズ マクマレン Ian James MCMULLEN (オックスフォード大学ペンブロークカレッジ教授・日文研外国人研究員) 「徳川時代の孔子祭」
⑱2	17. 7.12	CHUNG Jae Jeong 鄭　在貞 (ソウル市立大学校教授・日文研外国人研究員) 「韓日につきまとう歴史の影とその克服のための試み」
183	17. 9.20	オギュスタン ベルク Augustin BERQUE (フランス国立社会科学高等研究院教授・日文研外国人研究員) 「日本の住まいにおける風土性と持続性」
184	17.10.11	NO Sung Hwan 魯　成煥 (蔚山大学校人文大学日本語日本学科教授・日文研究外来研究員) 「韓国から見た日本のお盆」
185	17.11.16	セルゲイ ラプチェフ Sergey LAPTEV (マクシム・ゴリキー文学学院助教授・日文研外国人研究員) 「考古学と文字－古代日本の漢字文化を中心に」
186	17.12.20	YOON Sang In 尹 相仁 (漢陽大学校国際文化大学日本言語文化学科教授・日文研外国人研究員) 「〈日流〉の水脈－なぜ韓国の若者は日本の現代小説に惹かれるのか」
187	18. 1.10 (2006)	アンドリュー ガーストル Andrew GERSTLE (ロンドン大学 SOAS 教授・日文研外国人研究員) 「女形の身体を描く－肉体表現と流光斎－」
188	18. 2.21	ウィリアム パック ブレッカー William Puck BRECHER (南カリフォルニア大学助手・日文研外来研究員) 「郊外の隠遁への憧れ－江戸時代の郊外における美学的スペース－」
189	18. 3.14	サーレ アーデル アミン SALEH Adel Amin (カイロ大学文学部日本語学科専任講師・日文研外国人研究員) 「『国語』という神話－日本とエジプトにおける言語の近代化をめぐって－」

⑲⓪	18. 4.18 (2006)	KIM Yongui 金　容儀 (全南大学校人文大学副教授・日文研外国人研究員) 「玄界灘を渡った鬼のイメージ－なぜ韓国のトケビは日本の鬼のイメージで語られるのか－」
191	18. 5.16	CHOI Park Kwang 崔　博光 (成均館大学校教授・日文研外国人研究員) 「京都と文化表象－18世紀朝鮮通信使の目から－」
192	18. 6.13	LIU Chun Ying 劉　春英 (東北師範大学助教授・日文研外国人研究員) 「『満州国』時代『新京』に於ける日本人作家」
⑲③	18. 7.11	ZHOU Wei Hong 周　維宏 (北京日本学研究センター教授・日文研外国人研究員) 「近代化による農村の変貌とその捉え方について－中日農村を比較して－」
194	18. 9.19	ダリア　シュバンバリーテ Dalia ŠVAMBARYTĖ (リトアニア ビリニュス大学講師・日文研究外来研究員) 「オセアニアの島々のイメージ形成をめぐって」
195	18.10.10	エドウィーナ　パーマー Edwina PALMER (カンタベリー大学教授・国際日本文化研究センター外国人研究員) 「ニュージーランドの学生が学ぶ「日本」－高等教育の社会科カリキュラムを中心に－」

○は報告書既刊

なお、報告書の全文をホームページで見ることが出来ます。

http://www.nichibun.ac.jp/dbase/forum.htm

＊＊＊＊＊＊＊
発 行 日　2006年10月２日
編集発行　国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話（075）335-2048
ホームページ：http://www.nichibun.ac.jp
＊＊＊＊＊＊＊
©2006　国際日本文化研究センター

■ 日時

2006年４月18日（火）

午後２時～４時

■ 会場

キャンパスプラザ京都

第一九〇回　玄界灘を渡った鬼のイメージ

なぜ韓国のトケビは日本の鬼のイメージで語られるのか

金　容儀

国際日本文化研究センター